



#39

人に似せて形作られしモノ

著: 藍澤たすく

イラスト: かもめ遊羽

(また、いる……！)

鬼頭弘樹は冬の冷たい雨のそぼ降る商店街で、下校中の足を止めた。

その視線の先にはあるのは喫茶店の前に置いてあるマネキン。

白一色の、何の変哲もない女のマネキンだ。

そんな物がなぜ喫茶店の軒先に置いてあるのか？

普通なら違和感を覚えるはずなのだが、忙しいのか、雑踏の人々は無関心にその前を通り過ぎていくだけだ。

(本当に無関心なだけなのか……)

弘樹はもう一度マネキンをちらりと一瞥する。

(それとも……あるいは見えていないのか……)

いつもの疑問を頭の中で反芻する。

そして弘樹が瞬きをした刹那。

マネキンが人間の女に変化した。

一瞬の出来事である。

さきほどまではただのマネキンだったものが、今は喫茶店の前で待ち合わせをしているOL風の女性になっている。そして雑踏の人々はやはり気づく様子もなく、忙し気に彼女の前を通り過ぎていく。

やがて彼女も淀みない動作で傘を差し、雑踏の中に紛れ、姿を消した。
(最近増えたよな……)

そう、弘樹がこの現象を見るのは初めてではなかった。

1年ほど前に初めて目撃した時はものすごく驚いた。

自分がおかしくなったのかと思った。

しかしそれから1ヶ月に1人、1週間に1人、最近では2、3日に1人……と頻繁に目にするようになっていき、今では大した感慨も湧かなくなっていた。

そして下手に周りに話して、頭がおかしいと思われるのもイヤだったので、弘樹は誰にもこのことを喋っていないかった。

(あ、そうだ。今日は6時からコズミック・ウォーズ・リブートの再放送あるんだったっけ……早く帰ろっと)

弘樹がまた急いで家路に戻ろうとしたその瞬間。

(……！)

彼は凍りついたように足を止めた。

なぜなら、精肉店の軒先に、自分そっくりの白いマネキンを見つけたからだ。

「あ……」

あまりの衝撃に、思わず言葉にならない空気の塊が口から零れた。

しかし弘樹に動く間も与えず、そのマネキンはさきほどのOL風の女性と同じように、弘樹になり傘を差して雑踏の中に消えていった。

「うそ……だろ……」

弘樹はまだ行き交う人々の中で立ち尽くしていた。

今までは、不思議な現象、ぐらいで片づけることができていた。

しかし今は違う。

まさか、自分のマネキンが出現するなんて……。

あいつはどこに行った？ どこに行く気だ？

……まさか俺の家に帰る気じゃ……。そうしたら……。

そう思うと矢も盾もたまらなくなって、弘樹はマネキンが消えた方向に走り出した。

何度か人につつかって罵倒されたような気がする。

何かを物を落としたような気もする。

しかし弘樹にはそれにかまっている暇などなかった。

一刻も早くあいつを見つけないと……！

早く……早く……！

「うお!」

不意に背後から腕を握られ、弘樹は引き止められた。

とつさに振り向くと、そこには自分と同じ顔があった。

あまりのことに、弘樹は呆然として何もすることができない。

「きみ……」

やがて同じ顔がゆっくりと口をひらいた。

「マネキンよね?」

「ごめんなさい。まさか他にもあれが見える人がいたなんて……」

「いや、俺もそういう人には初めて会ったし、しょうがないよ」

弘樹と凜は駅前のファミレスでコーヒーを飲んでた。

自分とそっくりの顔を持つ、この凜という少女（驚くことに少女だった!）も、精肉店の前の例のマネキンを見て、弘樹をそいつだと勘違いして追ってきたらしい。

しかし変な気分だ。

もともと中性的な顔立ちで、とすれば女の子の間違えられるような弘樹だったが、実際にごうして「女の子になった自分」を目の前になると何とも言えない気持ちになる。

それは凜も同じようで、弘樹のほうをちらちらと見ながら、もじもじと何か言葉を探してい

る。

しばしの静寂。^{せいじやく。}

やがておずおずと口を開いたのは凧の方だった。

「……世の中には自分と似た人間が3人はいるって言うでしょ？」

「ああ、ドッベルゲンガーってやつ？」

弘樹はこの前観たSF映画を思い出した。確かそのドッベルゲンガーと会ってしまったと、その人間は死んでしまう……という展開の話だった。

「あたし……あのマネキンがそれじゃないかって気がするのよ……」

「まさか、そんな」

弘樹は笑い飛ばそうとしたが、凧の真剣な表情を見て気まずげに言葉を飲み込んだ。

「あのさ、この前の、竜崎歌仙のニュース知ってる？」

「ああ……」

それはちよつと前に世間をかなり騒がせたニュースだったので、普段世情に疎い弘樹でも知っていた。有名なロックミュージシャンである竜崎歌仙が自宅で変死したというニュースだ。目立った外傷はなく、ドラッグのせいだともいわれたが、当時は自殺説・他殺説入り乱れて大いにワイドショーを沸かせたものだった。

「あたし、あの人のマネキン見たの……」

「！」

「あのニュースがあつたのはその翌日……」

弘樹は言葉を失った。……ってことは……。

弘樹は背中に嫌な汗が流れるのを感じた。

「どうしよう……」

凧は独り言のように呟く。

「あたし達も……死んじゃうのかな……?」

「そ、そんなことないよ！」

とつさにそう応えた弘樹だったが、もちろん何の確証もなかった。

ただそう言うておかないと自分も不安の虜とりになってしまいそうで、怖かったのだ。

「とりあえず、あのマネキンと会わなければ大丈夫なんじゃないか？」

「そうね、そうよね……きつと大丈夫だよね……」

弘樹の言葉に、凧はまるで自分を落ち着かせるように何度もそう繰り返した。

そんな凧を見守っていた弘樹は、ふと、ある重要な事実が気がつき、思わず手にしていたコーヒーカップを取り落としそうになった。

慌てて、凧には気づかれないように、平静を装ってコーヒーを口に含む。

あいつは……。

あいつは凧と俺のどつちのマネキンなんだ？

弘樹は困惑した。

精肉店の前で例のマネキンを目撃したとき、自分と同じ顔だという衝撃のせいで、奴の衣服までは良く観察していなかった。

ただスカートなどではなく、男でも、女でも、どちらでも通用するようなラフな格好をしていたような気がする。

あれがもし凧のマネキンであるならば、自分は助かる……ということになるのだろうか？

いずれにせよ、マネキンがどこに行ったか判らない今、それは確認のしようがないことだった。

「でも、会わないようにするって言っても、一体どうすればいいのかしら……？」

「それは……」

弘樹は言葉に詰まった。

確かにマネキンがどこにいるか判らない以上、こちらからはどうすることもできない。

待ち伏せでもされれば、それで一卷の終わりだろう。

いや、待て。

考えるんだ。

考えれば、きつと何か……。

「コーヒーのお代わりはいかがですか？」

思考の海に沈んだ弘樹を、ウエイトレスの明るい声が現実に取り戻す。

「あ、俺はまだいい……」

言い終わらないうちに、弘樹の向かいからゴトツと鈍い、嫌な音が響いた。

見ると凧がテーブルに突っ伏して、びくりとも動かなくなっている。

その目からは生気が失われ、肌も血の気がなくなっていた。

そう、まるでマネキンのように。

「あら？ お客様？ どうされました、お客様？」

ウエイトレスが心配そうに凧に声をかける。

「！」

弘樹は思わず身を引いた。

ウエイトレスの顔が凧をつくりだったからだ。

（こいつが……さっきのマネキン……ってことは、俺じゃなくて彼女の……）

弘樹は突然の出来事にどうすればいいのか判らず、パニックに陥りかけていた。

（落ち着け、落ち着くんた。とりあえず、俺の命の危険はなくなつた。だけど、このウエイト

レス、マネキンだ。マネキンなんだろう？　じゃあ、俺は一体どうすれば……警察？　いや、先に救急車か？　ああ、でも一体誰がこんな話を信じてくれるって言うんだ……!?)

「店長ー！　ちょっと来てもらえますかー!?　具合が悪くなったお客様がいるようなんですけ
どー!」

弘樹の恐怖に満ちた視線に気がつくことなく、ウェイトレスは厨房ちゅうぼうに向かって大きな声で呼びかける。

「どうした、一体何の騒ぎだっというんだい？　あ、キミ、この書類、事務所に戻しておい
て」

近くにいたウェイターにそう指示を飛ばすと、店長と思しき男おぼが足早にこちらに向かってき
た。

そしてその店長は——弘樹そっくりの顔をしていたのだった。

おしまい